（今日もかっこいいな……♡）

定時後のオフィスで、パソコンを閉じる横顔を盗み見ながら、ぼんやりとそんなことを考える。矢代征弥くんは私の同期だ。同じ年に入社して、同じ研修を受けて、気づけば二年が経っていた。

飄々としていて、誰にでも塩対応なのに顔だけは甘い。切れ長の瞳に通った鼻筋、笑うと一瞬だけ崩れる口元。そのギャップにずっとやられっぱなしだった。

でも、好きになったのは顔だけじゃない。入社したばかりの頃、私が資料のミスで困っていたとき、矢代くんは何も聞かずに残って、修正を手伝ってくれた。ぶっきらぼうなのに、人の失敗を笑わず、助けたことさえ周りに言わない。

その日から、給湯室で珈琲を淹れる後ろ姿に見惚れては目を逸らし、飲み会で肩が触れただけで一晩眠れなくなるようになった。

今日こそ言う。何度も自分に言い聞かせて、定時後のフロアに残った。残業するふりをしながら、心

臓だけがばくばく鳴っている。フロアにはもう私たち二人しか残っていない。蛍光灯が半分落とされ、空調の低い唸りだけが響いている。今しかない。

「まだ帰らないの？」

　矢代くんはとっくに仕事を終えていたはずなのに、まだ席にいた。私がすぐに答えられずにいても、急かさず待ってくれた。その優しさに背中を押されて、私は椅子から立ち上がった。

「あ、あの……矢代くん」

　声がつかえた。心臓がうるさい。矢代くんがネクタイを緩めかけた手を止めて、こっちを見る。その視線だけで膝が笑いそうになる。

「好き、です♡ ずっと前から、矢代くんのことが好きでした……！♡」

言い切った瞬間、頭が真っ白になる。沈黙がこわい。耳まで熱い。

矢代くんは少しだけ目を見開いて、それからふ、と薄く笑った。

「ふうん。……それ、本気で言ってる？」
「ほ、本気です。冗談でこんなこと言えないよ……」
「じゃあ、証明してください」
「……え？」

私が言葉の意味を飲み込めずにいると、矢代くんが立ち上がる。

矢代くんは隣のデスクを回り込み、私の背後にあるデスクに手をついた。逃げ場を塞がれ、思わず身を引く。顔が近い。甘い顔立ちの奥で、瞳だけが妙に冷たく光っている。

「しょ、証明って……？」
「口でならいくらでも言えるでしょ。本当に好きなのか、体で証明して。できる？」

「か、体って……。ちょっ……矢代くん……？」
「できないなら、今の告白はなかったことにする。それでいい？」

　意地悪な声。けれど突き放すような響きではなくて、試すような、追い詰めるような甘さがある。

「……っ♡ できます♡ 証明、します♡」

　消え入りそうな声でそう答えると、矢代くんは満足げに目を細めて、私の手首を掴んだ。

「じゃ、移動しようか♡」

　引っ張られるまま、暗いフロアを出る。
　連れていかれたのは廊下の奥、フロアの端にある多目的トイレだった。中に押し込まれ、背後でかちりと鍵が閉まる音がやけに大きく響く。
　清掃の終わったフロアには、もう私たち以外の気配はない。それでも巡回の警備員がいつ来るかわか

らないと思うと、誰かに気づかれるかもしれない緊張で鼓動がさらに速くなった。白いタイルと、鏡と、二人分の息遣いだけがある。

「あの、矢代く……♡ んむっ！♡」

言いかけた唇が塞がれる。初めてのキスは驚くほど強引で、矢代くんの熱い舌がすぐに割り込んでくる。

口の中をぬるぬると掻き回されて、思考ごと溶かされていく。膝から力が抜け、矢代くんのワイシャツを掴んで必死に縋りつく。

ちゅ♡ くちゅ♡ れろ♡ れろっ♡

「ん、ふ……♡ んぅ……♡ 矢代くん……♡」

舌先で上顎をくすぐられて、ぞくぞくと背筋が震える。

歯列をなぞられ、縮こまった舌を搦め取られて、じゅるっと吸い上げられる。キスだけなのに、頭の

芯がじんと痺れ、脚の間が勝手にひくついてしまう。

「んぅ♡ ふぁ……！♡」
（キス、じょうず♡ とろけちゃいそう……！♡）
「ほら、もっと舌出して♡」

言われるまま、おずおずと舌を差し出すと、音を立てて吸われる。唾液を混ぜ合わせて、飲み込まされる。好きな人と唾液を交換しているんだと思うだけで、もう下着がぐしょぐしょになっているのがわかる。

キスされているだけなのに、頭の中がぽわぽわして、もう半分くらいバカになっている気がした。

「意外と積極的だね、君♡」

耳元で囁かれて、ぞくんと震える。大きな手がブラウスのボタンを一つずつ外していく。手際がよすぎて、抵抗する間もない。あっという間にブラウスの前を開かれ、ブラ越しの胸が照明の下に晒される。

「へえ♡ もう乳首、立ってる♡」
「あっ！♡」

　ブラのカップをずらされて、ふるりと胸がこぼれ出る。矢代くんの指先が、つんと尖った先端をかすめる。
　くりくり♡ くりくり♡

「ひゃ、あっ！♡ そこ、だめ♡」
「だめじゃないでしょ♡ 好きな人に触られて、気持ちいいんじゃないの？♡」
「ん、ぁ！♡ き、気持ち、いい……です♡」

　認めさせられて、頬が燃えるように熱くなる。
　片方の乳首を指の腹で転がされながら、もう片方は唇に含まれる。舌先でちろちろと嬲られ、たまに甘く歯を立てられる。
　ちゅ♡ ちゅぱ♡ れろ♡ れろ♡

「あっ！♡ はぁん！♡ 乳首、吸っちゃ♡」

ちゅううっ♡ と強く吸い上げられて、乳首がじんじん疼く。

舌先で先端をつかれ、転がされ、前歯で軽く挟まれる。こりこりに勃った乳首を指で捻られながら、反対側を吸われ、両方いっぺんに責められると頭が真っ白になる。

「ひぁっ！！♡♡」
「もっと虐めてあげる♡」

きゅう♡ と乳首を摘まれて、くりくり♡ と捻り潰される。

痛いくらいなのに、その痛みすら甘い快感に変わって、下腹がきゅんきゅん疼く。胸を弄られるたびに愛液がとろりと溢れ、下着の中がぬるぬるになっていく。

立ったままでは膝が震えて、矢代くんにしがみつくしかない。

くりっ♡ くりっ♡ ちゅぱっ♡ ちゅううっ♡

「あん♡ あん！♡ 乳首、きゅってしないで♡ 濡れちゃう♡ もっと濡れちゃうよぉ♡」
「胸だけでこんなに腰くねらせて♡ 下、どうなってるのか見せて？♡」
「や、やだ♡ 恥ずかしいよ♡」
「証明するんでしょ♡ 逃げるんだ？♡」
「っ……♡ 逃げない♡ 逃げないもん♡」

意地になって自分からスカートの裾に手をかける。でも震えてうまくできなくて、見かねた矢代くんがスカートをたくし上げ、下着を足元まで下ろす。そのまま下着から片脚を抜かれて、ひやりとした空気が濡れた秘所に触れた。

「うわ♡ すごい濡れてる♡ 糸引いてるの、わかる？♡」
「い、言わないでってば♡ あっ！♡」

矢代くんの指が、つぷりと割れ目をなぞる。くちゅ、と濡れた音が静かな個室に響いて、羞恥で消え